

俺、リムル・テンペストは魔物の国の訓練場で、シュナの魔法練習を見守っていた。
シュナの桃色の髪が揺れ、魔力を操る姿は舞のようだ。だが今日は様子がおかしい。
魔法陣は不安定で、額には汗が滲んでいた。

シュナ、大丈夫か？
無理すんなよ

リムル様
ご心配なく……！！

次の瞬間、魔法陣が暴走し、眩い光と魔力の奔流がシュナを包む。
俺は庇おうとしたが、弾き飛ばされた。

シュナの瞳は異様に潤み、頬は熱く紅潮していた。
彼女の声は甘く、まるで蜜を滴らせるよう。
嫌な予感がした瞬間、頭の中で「ラファエル」の音が響く。

シュナ！
しっかりしろ！

リムル様……
身体が……熱い……

告：シユナは魔力酔いによる
発情状態です。
治療には発情の解消が必要です。

マスターの身体で
受け止めるのが最適です。

は!? 発情!?
どうすんだよ!

俺が!? でも...
シユナのためなら...

リムル様... もう
我慢できません...!!

抵抗しようとしたが、彼女の指が俺の女性ボディの輪郭をなぞり、まるで火花が散るような快感が走る。過去の経験が脳裏をよぎる。イングラシアでのオークション、クレイマンに操られた事、そしてルミナス……。だが、シュナの瞳に宿る狂気じみた劣情は、それらを凌駕するほどだった。

リムル様……
あなたの全てを
私にください……

甘く狂気じみた声。震えるスライムボディは抗えず、彼女の唇が迫る。俺はその欲望の渦に飲み込まれていった。

リムル様……
私、我慢できません！

甘く狂気を帯びた声が訓練場に響く。
魔力暴走で理性を失ったシュナは、獲物を狙う獣のような眼差しで俺を見つめていた。

俺は女性体に擬態し、慣れないバニー姿。レオタードが体の線を強調し、うさ耳が場違いに可愛い。
対するシュナも同じ衣装をまとい、桃色の髪を揺らして迫ってくる。
普段の優雅な彼女の面影はなく、瞳には炎のような情欲が宿っていた。

抗う間もなく押し倒される。冷たい地面と彼女の熱が対照的で、背筋に悪寒めいた快感が走った。

シュナ……っ
どうしたんだ！
離せ……！

ふふ……
リムル様を独り占めできる
この時を待っていました……

リムル様、私をもっと
よく見てください…

艶やかな声と共に、
彼女は怪力で俺の足を開いた。
レオタード越しに秘部が露わになり、
羞恥で顔が一気に赤く染まる。
シユナは満足げに微笑み、
膝立ちになり股間に顔を近づけた。

や、やめろ
シユナ…っ
恥ずかしい…！

いいえ、リムル様
貴方の全てを
曝け出してください…



指が秘部を左右に広げ、奥まで見られる。
羞恥に身を震わせる俺の耳に、
蕩ける声と熱い吐息が触れた。

ああ、なんて…
なんて愛らしい…

ひっ…
見ないでくれ…
そんな所…

なぜ嫌がるのです？
こんなにも美しいのに
ああ、愛おしい…

くはぁ♡

シユナの指が柔らかく秘所をなぞる。
クリを撫で、周囲を押し引きするたび、
身体は勝手に震えた。
快感は抗えば抗うほど強まっていく。

ん……っ
や、やめっ……
くっ……

ぴん
ん

さあ、もつと感じてください
リムル様。貴方の身体は
こんなにも素直です

ふに♡

ふに♡



不意に指が奥へ入る。一本、そして二本。
迫りくる異物感と熱に身体が硬直した。

ご安心ください、リムル様
痛みはありませんから

内部をうねるように探られ、
慣れない快感がじわじわ広がっていく。

ひいっ…!?
やめ…
入って…っ!

大丈夫です、リムル様
私が貴方の奥を
優しく愛めますから



指が一点を捉え、グリグリと擦る。
電撃のような快感が全身を走り、理性が削られる。

あ…っ、そこ…っ
だめ…っ、ああっ…！

ふふ、見つけました
リムル様の
一番敏感な場所を…



っ、ああああああ
あああああっ！ー！ー！

限界を超えた快感が、俺の身体を突き抜けた。
意識が白く霞み、視界が歪む。全身が硬直し、激しい痙攣が襲う。
腰が勝手に跳ね上がり、呼吸は乱れ、喉の奥から情けない喘ぎ声が漏れ出た。



絶頂の余韻にぐったりと横たわる俺。
秘部から愛液が流れ出し、太腿を伝った。

あらあら、リムル様
こんなに…

シュナの瞳は、さらに爛々と輝きを増していた。
目の前でぐったりと愛液を垂らす俺の姿は、
彼女の発情をさらに煽るようだった。

はぁ…はぁ…
もう、勘弁してくれ…



リムル様、先ほどの
愛撫はいかがでしたか？
私の欲求は
まだまだ尽きません

シユナの甘く、蕩けるような声が、俺の耳元で囁かれた。
先ほどの激しい愛撫と絶頂で、俺の身体は既に限界を超えていた。
シユナは妖しく微笑むばかりで、俺の懇願に耳を傾ける様子はない。
俺の全身はシユナの巫女服に包まれ、
まるで魔法で地面に縛り付けられているかのようにだった。

シユナ…っ
どこまでやる
つもりだ…っ！

貴方の全てを
私色に染め上げる
までです、リムル様

今日は特別に、貴方の
最も奥深い場所を
私は見たいのです

ひっ…
やめろ…っ
そんな…っ！

がーっ!!!



リムル様の全てを
知りたいのです

シユナは俺の膝の間に腰を下ろし、秘部を覗き込む。
真剣な光を宿した視線に、羞恥心で血の気が引いた。

では早速
拝見させて
いただきます

ひっ…!?

少しの辛抱です
リムル様。すぐに
快感に変わりますから

シユナはそう言いながら、何の前触れもなく、金属製の器具を取り出した。
ひんやりとした感触が、俺の秘部の入り口に触れる。
シユナはゆっくりとクスコを押し込み始める。
硬い金属が、柔らかな粘膜を無理やり広げていくような感触に震えた。

すっ

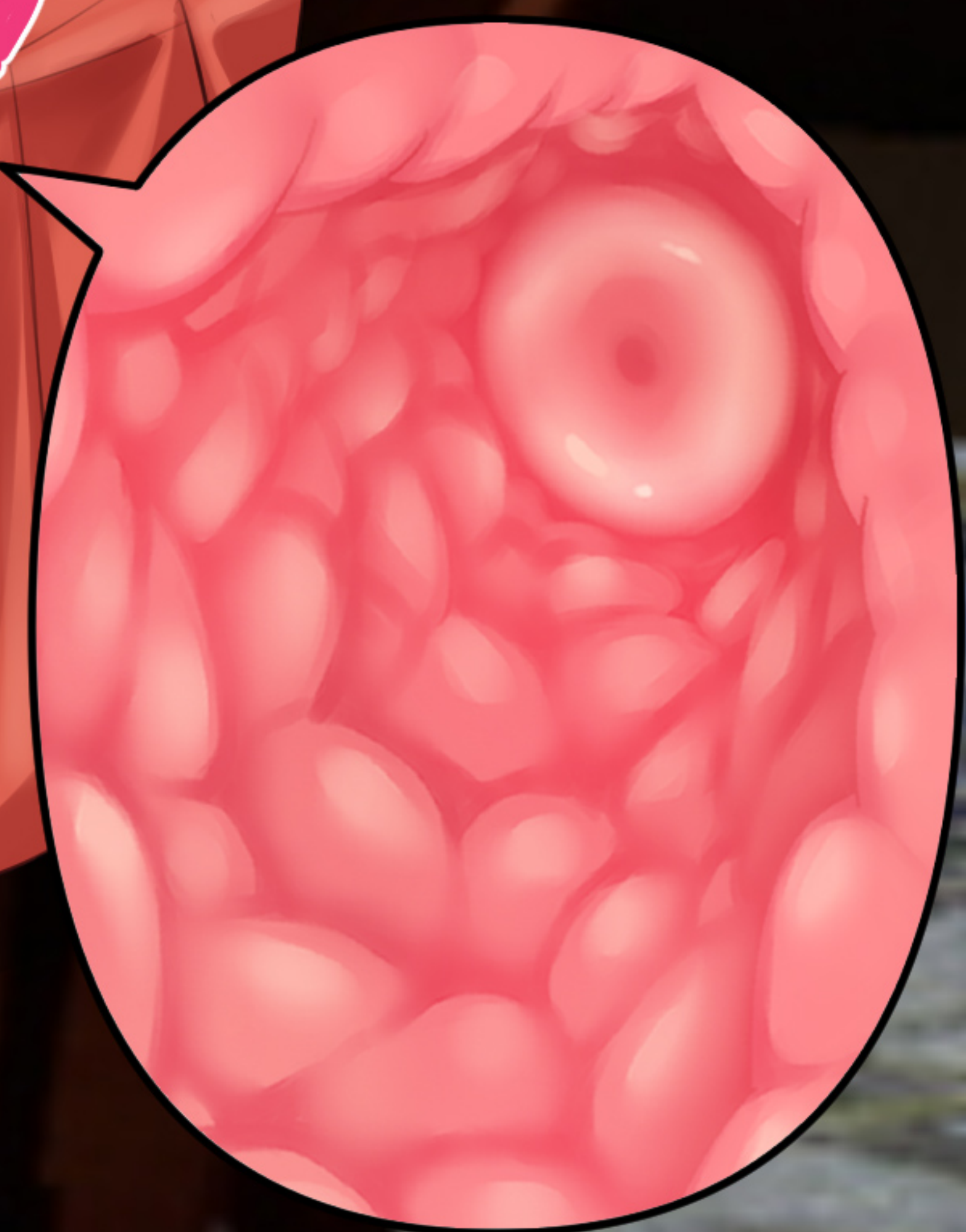
あら、なんて
美しいのでしょう
こんなにも可憐な花が
咲いていたのですね

うあぁっ…
全部…っ
見られてるっ…

クスコが完全に挿入されると子宮口が露になる。
まるで花が開くかのように露わになっていく。
内側から広げられ、全て見透かされる感覚に、
激しい羞恥心に身悶える。

くはぁ♡

ええ、全てです
貴方の神秘を
私は今、この目で
見つめております



リムル様…この時を
どれほど待ち望んで
いたことか

シュナの甘く、陶酔した声が、俺の耳元で囁かれた。
先ほどの産卵の余韻で、俺の身体は既に快感に麻痺しきっていた。
俺は体液で汚れた巫女服から、シュナの軍服へと着替えさせられた。
シュナは後ろから俺に抱きつき、その熱い吐息が首筋にかかる。
巫女服の袖が、俺の乱れた軍服に触れた。

うう…シュナ…
もう、流石に無理…

私が貴方を支え
もっと深く愛して
差し上げますから

俺の弱々しい懇願も虚しく、シュナの腕は俺の身体をしっかりと拘束していた。

シユナは、静かに魔力を練った。
すると訓練場の地面から、ぬるりとした触手が数本現れる。
触手は瞬く間に身体を固定し、俺は身動きが取れなくなった。
俺は、シユナの言動と触手の出現に、得体の知れない恐怖を感じた。

な……っ
触手だと……!?
何を考えてっ……!

怖くないですよリムル様
今では私の一部のような
ものですから

シユナは俺の背中に顔を埋め、うっとりとした息を漏らした。
その瞳は、狂気に満ちた光を宿していた。

さあ、我が愛しい
触手達……リムル様を
存分に愛でなさい

シユナがそう命じると、足元を蠢いていた触手が、太腿をよじ登り始めた。
軍服の裾が持ち上げられ、生々しい素肌が露わになる。
触手のぬるりとした感触が、俺の太腿を這い上がり、股間へと向かっていく。
俺は、触手の異様な感触に、ゾクゾクとした悪寒を覚えた。

ひっ……っ
や、やめ……っ！

フフッ……触手プレイも
お好きになってください
リムル様



触手は、ためらうことなく、俺の膣の入り口へと到達した。
そして、躊躇なく、その先端を膣内へと押し込み始める。
柔らかな粘膜が、触手にこじ開けられていくのが感じられた。

ふふご安心下さい
リムル様。これは
私の愛の証です

シユナは、後ろから抱きしめたまま、
俺の耳元で甘く囁いた。
触手は、まるで意思があるかのように、
俺の膣の奥へとゆっくりと侵入していく。

あ、ああ……っ
入ってくる……っ！

貴方の奥の奥まで
私が愛を
注ぎ込みますわ